

August 2, 2026

信仰の喜び ペテロ第一 1:6-9

1:6 そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。今しばらくの間、様々な試練の中で悲しまなければならぬのですが、

1:7 試練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、イエス・キリストが現れるとき、称賛と栄光と誉れをもたらします。

1:8 あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。

1:9 あなたがたが、信仰の結果であるたましいの救いを得ているからです。

皆さん、イエス・キリストを信じる信仰を持って良かったと思うことにどんなことがありますか。「くよくよすることがなくなった」、「人を赦せるようになった」、「心の安らぎを持てるようになった」、「人の悪口を気にしなくなった」、「物欲にとらわれなくなった」、「ものごとに積極的になった」などでしょうか。多くの人が「毎日、ほがらかに過ごせるようになった」、「小さなことでも喜べるようになった」と言います。何をしても楽しくなく、何にでも不満を口にしながら過ごしていたのに、イエスを信じて、心に喜びが湧き上がり、どんなことにも感謝できるようになった、喜びのなかった人生に喜びがやってきたという証しを数多く聞いてきました。「喜び」、それは信仰が与えてくれる素晴らしいギフトです。

一、苦難と喜び

信仰が私たちに与えてくれる「喜び」は確かな「喜び」で

す。ふわついたものではありません。「笑い」と「喜び」とは違います。カリフォルニアでは、毎夏、日本語の修養会が4つ行われます。あるところは50人ほど、あるところは300人ほどが集まります。私はそのうちの一番大きな修養会に毎年参加し、また奉仕もしてきました。2007年のことですが、そのころ日本では「お笑いブーム」で、子どもから大人まで、何か面白いことを言って、その場を盛り上げなければならないといった風潮がありました。牧師先生方が司会などで壇上に立つと冗談を連発して、会場は笑い声でいっぱいになりました。ユーモアは心をほぐしますし、笑うことも健康にいいのですが、度を過ぎると霊的なものを真剣に求める修養会の雰囲気壊してしまいます。そのとき講師の先生がメッセージを話される前に言われました。「牧師先生がたは人を笑わせるのがお上手ですね。吉本興業で勉強されたのでしょうか」と言われました。他の先生方がその言葉をどう受け止められたかは分かりませんが、私は、それをお叱りの言葉だと受け止めました。幸いなことに翌年からは、牧師たちがお笑い芸人の真似をすることがなくなりました。

面白いものを見聞きして「笑う」。自分の好きなものを「楽しむ」。それだけでいいなら、信仰の喜びはいりません。けれども私たちの毎日の生活や人生に起こることは、いつも楽しいことばかりではありません。嫌な目に遭い、苦しい思いもします。そんなときでも、私たちを立ち上がらせ、前進させてくれるもの、それが信仰の喜びです。きょうの箇所6-7節に、苦しみ、悲しみの中でも消えない信仰の喜びがこう描かれています。「そういうわけで、あなたがたは大いに喜んでいます。今しばらくの間、様々な試練の中で悲しまなければならないので

すが、試練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、イエス・キリストが現れるとき、称賛と栄光と誉れをもたらします。」

世界には未だに信仰の自由のない国があって、迫害を受けているクリスチャンが数多くいます。そんな国から来た青年がこう言いました。「私たちの国では、クリスチャンが地面に叩きつけられるようにして苦しめられます。けれども、私たちにはイエスを信じる喜びがあります。空気がいっぱい入ったボールは、強く叩きつけられれば叩き続けられるほど高く跳ね上がります。そのように、喜びに満たされた私たちは天にまで、イエスのもとにまで跳ね上がり、上っていくのです。」信仰の喜びは、苦しみや悲しみ、また、不安や疲れの中でも私たちを支え、励まし、力づけてくれます。

二、栄光と喜び

次に、信仰の喜びは、私たちを天の栄光に導きます。この世が与える喜びは、最初は大きくても、月日が経つと先細りし、やがて消えていきます。しかし、信仰の喜びは違います。信仰者は天を目指す巡礼ですが、その巡礼の旅では、天が近づけば近づくほど喜びが大きくなり、天では消えることのない栄光の喜びに変わるのです。7-8 節にこうあります。「試練で試されたあなたがたの信仰は、火で精錬されてもなお朽ちていく金よりも高価であり、イエス・キリストが現れるとき、称賛と栄光と誉れをもたらします。あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに躍っています。」今は試練に苦しみ、悲しむことがあっても、「イエス・

キリストが現れるとき」、また、私たちが天に迎えられるとき、私たちの受けた苦しみ、悲しみ、労苦は、称賛と栄光と誉れに変わります。私たちの喜びは、今も「ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜び」なのですが、そのときには、まさに栄光に包まれた永遠の喜びとなるのです。

8節に「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており」とあります。これは、喜びをもたらす「信仰」がどんなものであるかを教えています。ローマ 8:24 に「私たちは、この望みとともに救われたのです。目に見える望みは望みではありません。目で見ているものを、だれが望むでしょうか」とあるように、明らかに見えているものを受け入れることは「信仰」とは呼びません。たとえば、ペットボトル 1 本には 1 パイント、およそ 473 ml の水が入っています。1 ガロン（8 パイント）の鍋に水を満たすには、ペットボトルが 8 本要ります。その場合、「8 本のボトルが必要であると私は信じる」などとは誰も言いません。それは計算して分かることであり、結果を目で見ることが出来るからです。鍋に水を満たすのに「信仰」は要りません。必要なのは「知識」です。

しかし、列王記第二 4 章に書かれているように、エリシャがやめとなった母親に、たった 1 本の油の瓶で、家中に並べられた大小さまざまな器に油を満たすよう言ったとき、この母親には信仰が必要でした。たった一つの油の壺が部屋中に置かれた鍋や釜、壺や瓶のすべてを満たせるはずがないからです。けれども、彼女は信じてエリシャの言った通りにしたとき、何百倍もの油を手に入れました。彼女は借金取りに何もかも持っていかれ、二人の子どもも奴隷にされようとしていたのですが、

その油を売って借金を支払い、当座の暮らしが成り立つようになったのです。「知識」によって見えたものは空っぽの鍋や釜でした。しかし、「信仰」によっては、まだ見ていないもの、そこに満たされる大量の油を見ることができるのです。

私たちも、「イエス・キリストを見た」ことはありません。また、「今見て」はいません。しかし、聖書によってイエスがどのようなお方かを知り、「信じて」、「愛して」います。そして、やがての日にイエスを「見る」のです。もちろん、今でも、天の栄光の一部は私たちに示され、私たちはそれを垣間見ることができます。しかし、それはともしびで暗闇を照らすようなもので、わずかししか見えません。世界はまだ闇に包まれています。しかし、イエスが再び来られるとき夜は過ぎ去り昼となります。「義の太陽」と呼ばれるイエスの栄光があらゆるところに届き、暗いところも影も一切なくなります。それは栄光の日、喜びの日です。

三、救いと喜び

では、このような喜びはどこから来るのでしょうか。9節はこう言っています。「あなたがたが、信仰の結果であるたましいの救いを得ているからです。」イエスを信じる時、私たちは「救われ」、その救いが私たちに苦しみを乗り越え、天の栄光にあずかる「喜び」を与えてくれるのです。

私たちは人生で様々なものを手に入れ、努力して何かを達成してそれを喜びます。子どもたちは玩具や気に入った服や靴を手に入れて喜ぶでしょう。大人になれば車や住宅を手に入れて喜びます。また、懸命に勉強して学位を得て喜びます。会社で昇進して地位を得て喜びます。結婚して家庭を持ち子どもが生

まれて喜びます。経済的にも健康的にも恵まれた人はリタイアしたら各地を旅行をして喜ぶことができます。そうした喜びはけっして悪いものではありません。神からの賜物であり、感謝して受け取ればいいのです。しかし、そうした喜びの根底に「救い」の喜び、「たましいの救い」がなければ、楽しみの中にも思い患いや心配、不安や恐れがわき起こり、それらを抱えるようになります。

イエスが72人の弟子たちを伝道に遣わした時のことです。伝道を終えて帰ってきた弟子たちは興奮してこう言いました。「主よ。あなたの御名を用いると、悪霊どもでさえ私たちに服従します。」（ルカ 10:17）悪霊に憑かれた人たちが、弟子たちの伝道を妨げたのでしょう。弟子たちはイエスから教えられた通り、イエスの御名を使って悪霊に命じました。すると、悪霊は弟子たちに服従したのです。弟子たちにとってはじめての経験でしたので、そのことを喜んでイエスに報告しました。けれども、イエスは言われました。「しかし、霊どもがあなたがたに服従することを喜ぶのではなく、あなたがたの名が天に書き記されていることを喜びなさい。」（ルカ 10:20）

「たましいの救い」はどんな奇跡よりも、悪霊の追放よりも、また、からだの癒やしよりも大切なものです。癒やしも、悪霊の追放も、奇跡も実際のところ人々の「たましいの救い」のための補助なのです。

パウロはコリント第一 13:1-3 で「愛」がなければ「異言」や「預言」も、「知識」や「信仰」も、「犠牲」や「殉教」も何の価値もなく、役に立たないと教えています。この箇所の「愛」の代わりに「たましいの救い」にして読むと、こうなります。「たとえば私が預言の賜物を持ち、あらゆる奥義とあらゆる

る知識に通じていても、たとえ山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、【たましいの救い】がないなら、私は無に等しいのです。たとえ私が持っている物のすべてを分け与えても、たとえ私のからだを引き渡して誇ることになっても、【たましいの救い】がなければ、何の役にも立ちません。」どんな霊的な賜物、能力も、たましいの救いから来る喜びに勝るものではありません。苦しみによっても消えることがない喜び、天の栄光へとつながる喜びは、ただ「たましいの救い」だけを与えることができるのです。

「罪の報酬は死です。しかし神の賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」（ローマ 6:23）とあるように救いは賜物（ギフト）です。イエスは私たちが救われるためにすべてのことをなしててくださいました。私たちにできることは救いのギフトを受け取るだけです。救いのギフト・ボックスには「罪の赦し」、「新しい命」、「神の子ども」などの身分など、私たちに必要なものがすべて、ぎっしりと詰まっています。この救いの賜物を受け取ったなら、そのパッケージを開けてください。それを開けるたびに新しいアイテムを引き出し、それによって力を受けましょう。そして、そのたびに、救われている喜びに生かされ、信仰の喜びを証しする者になりたいと思います。

（祈り）

父なる神さま、私たちは以前、ほんとうの喜びを知りませんでした。束の間の楽しみしか知らず、それが消えていくたびにわびしい思いをくりかえしてきました。しかし、イエスを信じてからは消えることのない救いの喜びが心にあります。父なる

神さま、あなたはこの喜びを御子イエスによって与え、聖霊によって保ってくださいます。この喜びが私たちの日々を支え、生かすものとなりますよう導いてください。この喜びを、まだそれを知らない人々と分かち合うことができるよう助けてください。主イエス・キリストのお名前で祈ります。